

かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第51号（令和7年1月）

あゆむ「文化財めぐりは、1年ぶりだね。」
ミドリ「そうね。お互いに忙しくてなかなかそろって行けなかったものね。」
ふみお「今日は、彫刻^{ちようこく}だって？」
文じい「ふむ。」
あゆむ「彫刻^{ちようこく}と言うと、彫刻刀で版画を彫ったり 何かかざりものを作ったりするね。」
文じい「そう。しかし、昔から仏像^{ぶつぞう}であるとか、建物の壁や柱などの部分に飾りをつけるとかで、彫刻はたくさん行われてきた。」
ミドリ「なるほど、そういえば、寺や神社などの屋根の下の方などに、彫刻したものをよく見るわね。」
ふみお「日光の“東照宮陽明門”^{とうしやうぐうやうめいもん}の彫刻は有名だよ。修学旅行で行った時、見たよ。」
あゆむ「ふうん。それで今日はどこなの？」
文じい「十日町の“観音寺”^{かんのんじ}さんじゃ。」
ミドリ「あ、知っている。あのお風呂の“下大湯”^{しもおおゆ}の上の“湯の上観音”^{ゆのかみんのん}さんね。」
あゆむ「この石段を登ると、おお、いろんなものがあるぞ。」
ふみお「ひとつひとつ調べてみたくなるな。」
ミドリ「あの、本堂がそうなの？」



あゆむ「屋根の上の部分はこわい顔だね。」
ミドリ「屋根の下^{した}の鬼も、まるで屋根を力強く支えているようだよ。」
文じい「屋根の上にあるのは邪気^{じやき}を払う般若^{はんにゃ}。その下の拝むところの屋根、これを向拝^{こうはい}

法圓寺

欄間の彫刻

ほうえんじ

らんま

ちようこく

懸魚

・

向拝

（龍）

げぎよ

こうはい

りゆう

観音寺

大日堂の

かんのんじ

だいにちどう

というが、それを支えているように彫られているのが金剛力士^{こんごうりきし}じゃな。」

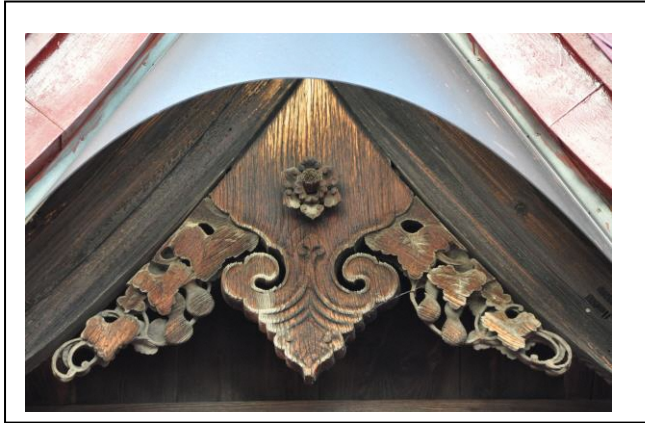
あゆむ「すごいね。迫力^{はくりき}があるな！」
文じい「しかし、今回見るのは右にある“大日堂”^{だいにちどう}の方じゃ。」



ミドリ「えっ、あらそうなの。」
ふみお「近づいて見てみよう。なるほど、やっぱり彫り物があるな。」
あゆむ「こっちには般若^{はんにゃ}はないな。」
ミドリ「でも、その下に何かさがっているわ。」
文じい「おお、よく見つけた。懸魚^{げぎよ}じゃ。」
あゆむ「“げぎよ”？なんかおもしろい名前だね。どういうものなの？」

文じい「雨水を防ぐためとか、飾りということでもあるが、魚を懸けるということ“けんぎょ”とも呼び、魚に水をかけるという意味にもなり、火災から守るという願いも込められておるようじゃ。」

ミドリ「なるほど。それでこの形は何を表しているのかしら？」



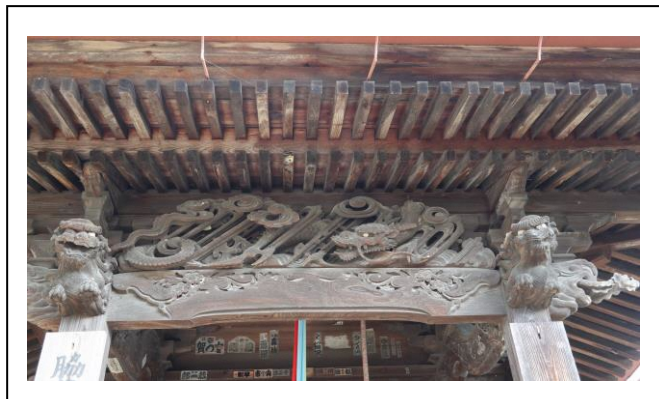
文じい「鰻型と言われ、野菜の蕪の形じゃの。」

あゆむ「わきにはふさのようなものが付いているけど・・・。」

文じい「鰻というもののじゃが、瓢箪とその葉、茎、実が立体的に組み合わされている。」

ミドリ「なるほどね。そうやって見ていると細かい技が見えて楽しいわ。」

ふみお「向拝の彫り物もすごいな。」



あゆむ「ふむ。龍が力強く空を泳ぐような様子が彫られている。それに、柱の上の獅子、そして、横に渡っている梁、それを虹梁と言うが、その両端に象の顔のような木鼻がある。」

ミドリ「よく見ると、本当に細かくていねいに彫られているのね。」

あゆむ「これを彫ったのはだれなのかな。」

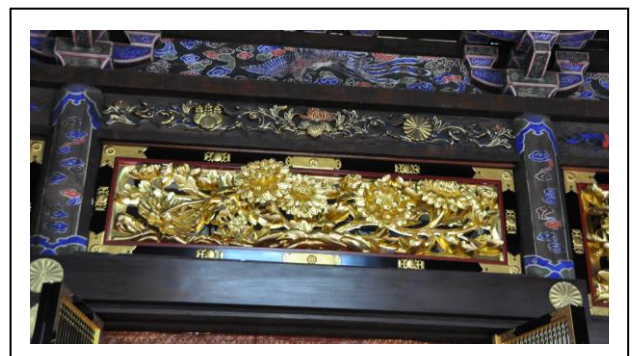
文じい「栗野音松という人じゃ。江戸時代、半郷生まれの方じゃが、江戸の彫刻師の門にも入って、やがて戻って来て、あちらこちらから頼まれて彫った。」

ふみお「上山には他にもあるの？」

文じい「実は、ここから向かいに見える“法圓寺”さんにもある。」

あゆむ「え、見てみたいな。」

文じい「ふむ。法圓寺さんのものは、寺の中の欄間なので、勝手に入っちゃだめだ。きちんと許可をいただいてからにしないとご迷惑がかかる。それで、今日は、この図録にある写真を見るだけにしよう。」



ミドリ「すごいわね。」

文じい「どちらの寺のものも上山の絵師丸野清耕という人の下絵によるものなのじゃが、法圓寺さんでは、法事などで行った時に見せてもらうといいね。」

ふみお「この上山で、すばらしい芸術家たちが活躍していたんだね。」